論文の内容の要旨

論文題目　：朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究
氏名　　：陳 南 澤

本稿は、日本語と韓国語における音声・音韻の変遷を15世紀から18世紀における朝鮮資料（日本語をハングルで記録した文献：日本語学習書および日本紀行資料）と日本資料（韓国語を仮名で記録した文献）の音注の分析を通して通時的に考察する。このような外国資料は自国の文字による国内文献（ハングル資料・仮名資料）には現れにくいような言語的側面を示すという点で高い価値を持っている。

本稿で分析した資料は次のようになる。

(1) 日本語学習書
　① 弘治 5年 伊路波（1492 刊行）
　② 捷解新語（原刊本 1676、改修本 1748、重刊本 1781）
　③ 倭語類解（1783-1789 刊行 推定）
　④ 方言集釈（1778 写本）

(2) 日本紀行資料
　① 老松堂日本行録（1420年）
　② 海東諸国記（1471年）
　③ 東槎日記（1617年）
　④ 扶桑録（1617年）
　⑤ 看羊録（1656年）
　⑥ 扶桑日録（1655年）
　⑦ 聞見別録（1655年）
　⑧ 海槎録（1719年）
　⑨ 扶桑録（1719年）
　⑩ 癸未随槎録（1764年）
　⑪ 東槎日記（1763年）

(3) 琉球語をハングルで記録した文献
　① 語音飜訳（1501年）
　② 漂海録（19世紀初）

(4) 朝鮮語を仮名で記録した文献
　①『陰徳記』高麗詞之事（17世紀）
　②『和漢三才図会』第13巻「異国人物朝鮮国語」（1705年）
　③『朝鮮物語』第5巻「朝鮮の国語」（1750年）

④『全一道人』(1729年)
⑤ 朝鮮通信使一行座目 (1764年)
⑥ 物名 (18世紀後半以後)
⑦ Aston旧蔵『交隣須知』 (18世紀後半以後)

朝鮮資料と日本資料を扱った先行研究では、音韻史について既存の通説に基づいて文献を解釈している点がみられるが、本稿では、通説は考慮に入れながらも分析資料そのものを一つの体系とみて分析を行い、その体系から音注の価値を判断する。これにより、一方では通説に対して新たな論を示し、また一方では音の変遷の過程をより詳しく確かめることができた。

第2章と第3章では日本語音韻史の諸問題を、朝鮮資料の音注を用いて分析した。これまでも『捷解新語』などの日本語学習書のハングル音注は日本語の音韻史研究に用いられてきたが、その解釈は様々であって、朝鮮資料の性質を正確にとらえたものは少ないと考えられる。本稿では、朝鮮時代の日本語学習書の他に、15世紀から18世紀までの11種の「日本紀行資料」に現れる地名のハングル (または漢字) 音注表記を分析に加えて、その結果、日本語の音変化の様子を詳しくみることができた。さらに、この分析により、『捷解新語』などの朝鮮資料の価値を再確立できたと考える。日本語音韻史における分析結果は次のようになる。

1) 15世紀においても既に「オ」は[wo]ではなく、[o]であった。
2) 「アウ・オウ」は[ou]に合流しているが、「オオ」は[oo(o:)]であって、18世紀までに「オオ」と「アウ・オウ」との合流はまだ完了していなかった。「オ段長音」の変遷をまとめると次のようになる。

① 橋本進吉説

アウ	開音	au	>	ao	>	ŏ [ɔ:]	>	[o:]
オウ	合音	ou		>		ô [o:]	=	[o:]

② 川上蓁・豊島正之：オホの変化は豊島(1984)による。

アウ	開音	au	>	*ao	>	oo	=	oo [o:]
オウ	合音	ou	==========			ou	>	oo [o:]
オホ	合音	owo		>		ou (ow)	>	oo [o:]

③ 本稿で推定する「オ段長音」の変遷

アウ	開音	au		>		ou	>	oo [o:]
オウ	合音	ou	==========			ou	>	oo [o:]
オホ	合音	owo		>		oo	=	oo [o:]

3)　エ列音の口蓋性は朝鮮資料のハングル音注からは明らかにできないが、韓国語の単母音化を示す例が現れる点を指摘した。

4) 17世紀半ばごろに「ツ・ス」の音価は[tsu]・[su]から[tsɯ]・[sɯ]に変わった

5) 濁音の鼻音的要素の変遷過程をみると、15世紀には「ザ行・バ行・ダ行・ガ行」に鼻音的要素があったが、「ザ行・バ行（15－16世紀）＞ダ行(17世紀）＞ガ行」の順に鼻音的要素が消失した。

6) 15～18世紀の「カ行・タ行」の清音は、現代東京方言のような tenseの破裂音ではなく、例えば「カ行」は音声のレベルでは [g]～[ɡ]の範囲の実現をする音であった。

7) 15世紀の清濁（カ行：ガ行、タ行：ダ行、サ行：ザ行)の対立は基本的に「非鼻音：鼻音」であった。

8) ハ行は大体17世紀に [ɸ] から [h] になった。

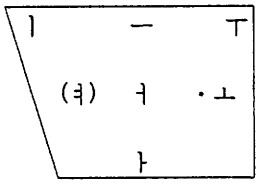
9)「チ・ツ・ヂ・ヅ」の破擦音化は15世紀末から16世紀半ばの間に進んだ。

10) 17世紀まで四つ仮名は区別できた。

11)「ン」の音価は15世紀においても現代とほぼ同様であった。

第4章と第5章では日本資料を用いて中世・近代韓国語における母音の音価とその変遷、また子音の変遷を考察した。本稿の結果をまとめると、次のようになる。

12) 15世紀の「・」は非円唇後舌中母音であり、「ㅓ」は非円唇中舌中母音であった。本稿では15世紀の母音体系を次のように推定する。



13)「・」と「·ㅣ」の変遷の順序は次のようになる。

① 語頭の「·ㅣ ＞ ㅐ」

② 語頭の「・ ＞ ㅏ」

③ 非語頭（固有語）の「・ ＞ ㅡ」と「·ㅣ ＞ ㅓ」

14) 二重母音の単母音化は18世紀末までほとんど起こっていない。

15) 語音飜訳の分析からは、当時の「ㅈ(j)に口蓋異音があったかどうかは断定できない。

16)「ㄷ(d)口蓋音化」は「ㅈ(j)口蓋音化」より早かった。

17) ㅅ(s)-系子音群は『全一道人』の時代にも語によって子音群として発音されたが、『物名』と『交隣須知』の時代にはいずれも濃音になっていた。

18) ㄴ脱落は18世紀末までほとんど起こらなかった。

本稿では朝鮮資料と日本資料の音注を用いて両言語の音韻史の諸問題を考察し、以上の結果が得られた。今後の課題としては、より多くの資料を発掘する必要がある。特に19世紀以後の文献を分析すれば、日本語のオ段長音および清濁の変遷と韓国語の前舌単母音化と口蓋音化の過程などを明らかにできると考える。